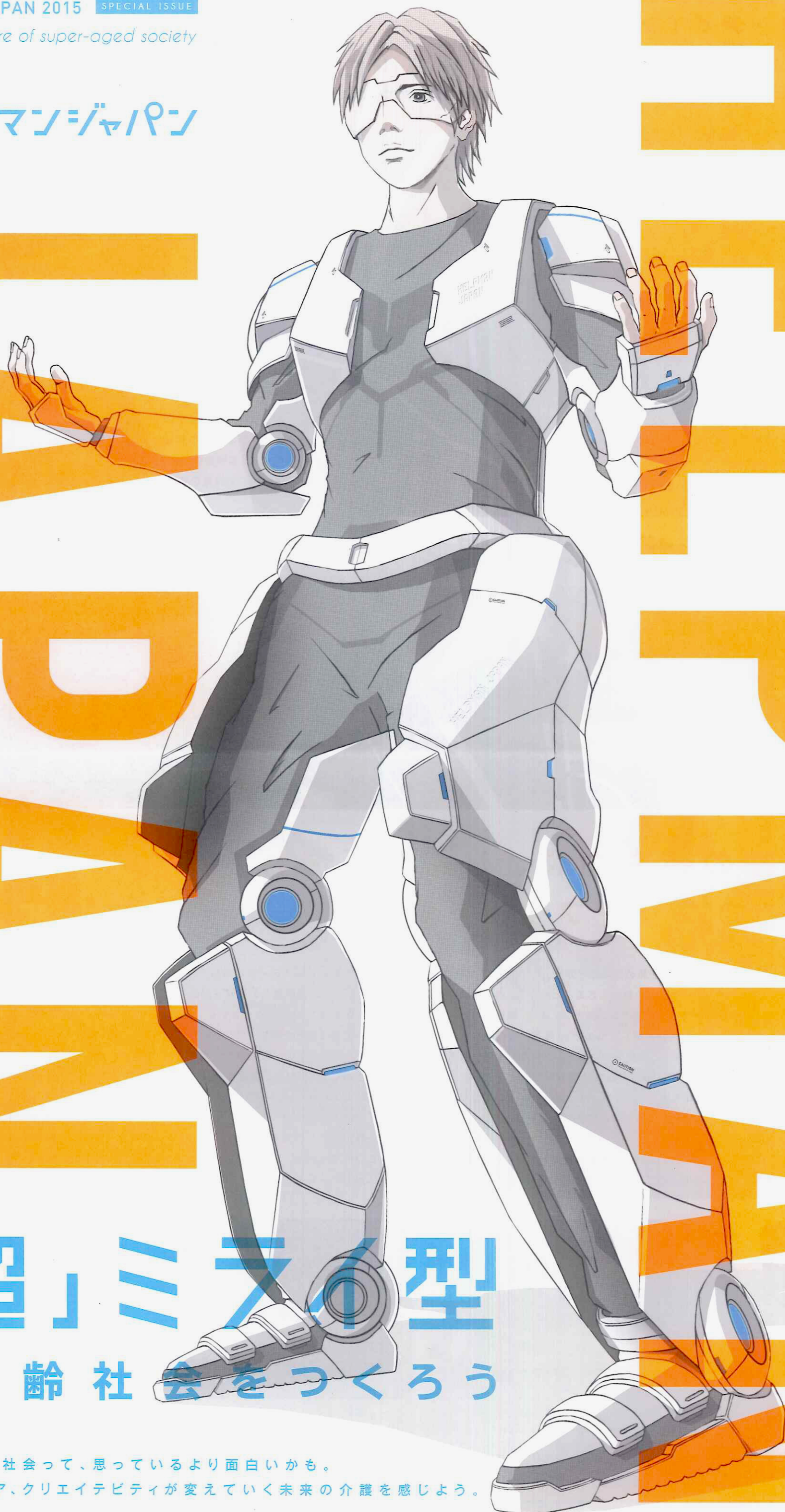


ヘルプマン=ジャパン



「超」ミライ型

超高齢社会をつくろう

未来の超高齢社会って、思っているより面白いかも。
技術やアイデア、クリエイティビティが変えていく未来の介護を感じよう。



株式会社シルバーウッド 代表取締役 /
一般財団法人サービス付き高齢者向け住宅協会 理事

下河原忠道さん

2000年、スチールパネル工法を事業の柱としたシルバーウッドを設立。高齢者住宅の施工を請け負ったことを機に高齢者住宅の世界に。2015年には西新井大師で4棟目となるサ高住を開業。高齢者に自立を促しながら介護をし、「わが家」と思ってもらえるような住まいと近隣とのつながりをもっている。

シルバーウッド / 銀木犀

世界中の高齢者住宅を見てきた男がつくる “終の住処”とは？

理想の“終の住処”とは？そんな問いを持ち、世界中の高齢者住宅を見て回った男がいる。サービス付き高齢者向け住宅「銀木犀」を経営する下河原さんだ。「もともと建築の構造躯体メーカーを経営していたのですが、偶然、高齢者向け住宅の施工を頼まれたことを機に、もっと素敵な住宅はつくれないかと思うようになりました」。業界の課題に気付いた下河原さんは、早速、北欧、アメリカ、フランス、イギリスなどの高齢者向け住宅を視察して回ることになる。「目からうろこでした。とにかくお年寄りがイキイキと暮らしている。そこには“終の住処”のひとつの答えがあると思いました」。そんな下河原さんのつくる高齢者向け住宅は、木の温もりにあふれ、廊下のあちこちに小さなソファが置かれた“隠れ家”があり、庭園は懐かしい里山の樹木で覆われている。「インテリアデザインでは、入居者が時間をかけて“わが家”と感ぜられるような温かい仕掛けと、遊び心を大切にしています。そして、もっともこだわっているのはソフトの部分。入居者が最期まで生きられる場所として銀木犀を選べるように、

本人や家族と“看取り”についてよく話し合うようにしています。たとえば「終末期において救急車を呼ぶか」など。納得していただき、実際にたくさんの方が銀木犀で終末期を過ごされています」。ほかにも、入居者の自立を促すためにスタッフは過度なサポートは行わず“自己決定の支援”こそ自らの仕事であるという文化をつくりあげている。また入居者に“役割を提供”することも生きる張り合いを持つために重要な支援だと下河原さんは言う。「陶芸の業務用電気釜を購入しました。プロの監修のもと製品開発を行い、入居者がその制作に関わることを前提に商品を完成し、実際に店舗で販売する予定です」。要介護度を下げる努力を促し、可能な限り社会と関わりを持ち、ありのままの自尊心を失わずに最期まで生きる。ビジネスの世界から介護の世界に飛び込んだ下河原さんが、業界に新しい風を吹き込んでいる。



銀木犀は、スチールパネル工法という独自の工法を用い、建築費のコストダウンにも成功している。「余った資金で、内装やインテリアに力を入れています」とのこと



併設された駄菓子屋は、学校が終わる時間帯に店開き。ここで、入居者が商品を買ったり子どもの相手をしたりする。その働きにも、仕事としてギャラをお支払いするそう



よい高齢者向け住宅にはよいコミュニティが必要と説く、下河原さんが取り入れた認知症ケアのひとつが、ドラムサークル。まるで“部活”のように地域のお祭りなどに遠征にも行くそう



亡くなった方のお別れ会も行っている。「病院で管につながれた臨終から、家族と友人たちに見守られた人間らしい臨終を、もっと増やしていきたいのです」